

◆本報告書の要約

第1章 週5日制をめぐって

第1節 月2回週5日制への対応

1. 年間総授業時数の変化

年間総授業時数を減らした小学校は5校に2校ほど。岩手県、岡山県では半数以上の小学校が減らしているのに対して、東京都、福岡県、熊本県は3分の1程度の小学校が減らしているにとどまっている。(図1-1、図1-2)

2. 時間割上の工夫

短縮授業日を削減したのは3校に2校、学校行事の日に授業を行うのは3校に1校、同じく3校に1校が土曜日の授業を他の曜日に上乗せしている。年間総授業時数を変えていない小学校のほうが減らした小学校よりも、土曜日の授業を他の曜日に上乗せした割合が20ポイント近く高い。(図1-3、図1-5)

第2節 学校行事への影響

1. 学校行事の実施状況

遠足、運動会は9割以上、学芸会・音楽会、鑑賞教室は8割以上の小学校で行われている。展覧会、スポーツ大会は、ほとんどの小学校で行っている県がある一方、半数以上の小学校で行っていない県もあるなど、都県別に実施している割合に大きな差がみられる。(図1-6、表1-2)

2. 学校行事の変化の様子

半数以上の小学校が、学校行事を削減・統合したり、学校行事の準備時間を削減したり、学校行事を各教科の活動と統合・読み替えたりして対応している一方、家庭訪問を中止・削減したり、道徳や学級活動の時間を削減したりした小学校は1割内外にとどまっている。(図1-7)

第2章 授業の進め方と児童の変化

第1節 授業の進め方とその変化

1. 授業時間の使い方・進め方

授業時間の使い方・進め方で、特に心がけているのは、「児童の発言や発表の時間」(73.0%)、「机間指導や児童に個別に対応する時間」(65.7%)、「練習や演習の時間」(50.5%)、あまり心がけていないのが、「将来、国・私立中学校や高校入試に役立ちそう

な点の解説や演習」(89.7%)、「余談をする時間」(45.7%)、「問題集や副教材の使用」(39.5%)。(図2-1)

2. 授業内容や進め方の変化の感じ方

3人に2人が授業の進度の遅れや定着度の低下を実感。教科書が最後まで終わらないことが多かったと感じているのは3人に1人。(図2-2)

3. 進度が遅れたときの対応

進度の遅れには、「授業内容を精選」(93.1%)、「他教科の授業をまわす」(63.0%)、「他の単元でカバーできるところを削減」(39.6%)、「説明や練習にかける時間を短縮」(27.3%)、「宿題にまわす」(23.9%)などで対応。(図2-5)

第2節 児童の変化

数年前と比べて、「リーダーシップをとれる児童」「粘り強い思考力のある児童」「落ち着きのある児童」「協調性のある児童」が減ったと3人に2人の教師が感じている。また半数近い教師が「自己表現能力の高い児童」「やる気や自信を持つ児童」が減ったと感じている。一方、大半の教師が「自己中心的な児童」が、3人に2人の教師が「学校や教師に対して冷めたところのある児童」が増え、「児童の間の学力格差」が大きくなっている。(図2-7、図2-8)

第3章 学習指導

第1節 宿題と家庭学習の指導

1. 担任の学年と授業を行っている学年

担任あるいは副担任をしている教師のうちで、授業最多学年で担任・副担任をしている教師は79.3%とおよそ8割であり、学年別には1年生80.6%、2年生75.0%、3年生78.4%、4年生76.3%、5年生81.4%、6年生84.4%である。

2. 宿題を出す頻度

小学校では、およそ8割の教師が毎日宿題を出している。学年ごとに、1年生を教えている教師の9割弱が毎日宿題を出し、学年が上がるにつれその割合が減少し、6年生を教えている教師ではおよそ7割まで減っている。力を入れている教科別には、算数と国語に力を入れている教師が頻繁に宿題を出し、理科に力を入れている教師で少なくなっている。(図3-1、図3-2、図3-3)

3. 宿題の時間と予習的要素の有無

平均的な児童にとっての宿題の時間(量)は、小学校では、87.6%が30分までである。また、30分までの合計をもとに学年別の変化をみると、低学年、中学年、高学年で宿題の時間が異なっている。低学年の1年生と2年生はほぼ同じ値の94.4%と94.5%、ほとんど

の教師が30分以内で終えることのできる宿題を出している。しかし、その割合は中学年では9割弱に減り、高学年では8割弱まで減少する。

宿題の内容が予習的か復習的かでは、中学校では「予習的な内容が多い」12.9%、「半々くらい」12.9%と宿題の内容に予習的な要素が少なくない。これに対して、小学校では「予習的な内容が多い」0.6%、「半々くらい」5.7%と予習的な要素は非常に少ない。すなわち、小学校の宿題は中学校よりも復習的な内容になっている。ただし学年別には、学年が上がるごとに予習的な要素が強まっていく。(表3-1、表3-2)

4. 宿題の内容

小学校でもっとも多く出されている宿題は、「学校指定の副教材・問題集・ドリル」であり、およそ9割に達している。小学校の学力補充・家庭学習の第1位は、市販教材を利用して行われているのである。第2位は、昔からの宿題の定番である「音読」であった。学校週5日制による授業時数削減の影響が予想される「教科書の問題」や「授業のやり残し」は、ベスト3をはずれ第4位、第5位に並んでいる。現時点では、宿題は授業のやり残しの消化であるよりも学力補充・家庭学習であるといえる。

学年別には、「音読」は小学校低学年ではほぼ“必修”に近い宿題であり、学年が上がるごとに頻度は下がるもの、6年生でも70.1%と比較的高い割合になっている。これに対して、「学校指定の副教材・問題集・ドリル」は、学年が上がるにつれて増加し、3年生からは音読に代わって第1位になり、中学年・高学年では9割を超えていている。(図3-4、図3-5)

5. 家庭学習指導の有無と時間

家庭学習指導の実施率は、小学校では64.2%が実施し、中学校の70.7%よりもわずかに少なくなっている。また、どれくらいの時間学習するよう指導しているかをみると、45分未満が7割強を占め、1時間以上が3割弱となっている。最頻値（もっとも割合の高いカテゴリー）をみると、「30分」44.7%であった。授業最多学年ごとに家庭学習指導の実施率をみると、1年生では58.9%であったのが学年とともに上昇し6年生では73.1%と、14.2ポイント上昇している。(図3-6、表3-3、表3-4)

6. 都県別にみた宿題と家庭学習指導

調査対象となった6つの都県ごとに宿題頻度、家庭学習指導実施率が異なっていた。福岡県が宿題頻度、家庭学習指導実施率ともに高い。岡山県と熊本県は宿題頻度が高い。岩手県は家庭学習指導実施率が高い。新潟県と東京都は、宿題頻度も家庭学習指導実施率も低い。(表3-5、図3-7)

第2節 授業を進めるときの目安となる児童（ステアリング・グループ）

教育学では、授業を進めるときの目安とする児童たちをステアリング・グループと呼んでいる。小学校では「中の下位」がステアリング・グループになっている割合がもっとも多く(47.4%)、5割弱になっている。「中の下位」「下位」といった平均よりも下位の成績の児童をステアリング・グループにしている割合は、学年が上がるごとに少なくなり、

1年生が57.8%であったのが、6年生では47.4%と減少する。(図3-8、図3-9)

第3節 心がけている授業方法と新しい学習方法

1. 心がけている授業

授業方法の中で、教師が心がけている割合が少なかったのは「1) 教師主導の講義形式の授業」「2) 教科書にそった授業」「3) 自作プリントを使った授業」の3つであった。これらの授業方法は日常的・基本的授業方法だからこそ、もっと意識して授業展開する必要があるのではないか。これに対して、新しい学習方法と結びついた方法では、教師が意識して取り組みつつある様子をみてとることができる。(図3-10)

2. 新しい学習指導方法の実施状況

小学校では、新しい学習指導方法が積極的に取り入れられている。特に、「D. 学校内の体験的方法による学習」86.2%、「E. 学校外での現場・フィールドでの体験的方法による学習」58.7%、「F. 学校外の施設・センターなどを利用した学習」35.5%、「C. 総合的な学習」50.3%など、体験学習的な方法の実施率が高い。さらに、調べ学習、テーマ学習など、児童が自分で調べる学習も実施率が高い。なお、新しい学習指導方法の実施率に関しては、小学校と中学校で大差があり、中学校のほうが実施率が低い。(図3-12)

第4章 評価

第1節 「学習の記録」の形式

1. 「学習の記録」の多様な形式—評定から観点別学習状況へ

通知票の「学習の記録」の形式は多様化しているが、その形式の主流は、「総合的な評定」から「観点別学習状況」へ移行している。今や、観点別学習状況を取り入れているところは8割に対し、評定を取り入れているところは3割程度である。さらに、低学年では、評定が取り入れられているところは2割を切っている。また、通知票の形式を都県別に比べると、顕著な地域差がみられる。(図4-1、図4-3、表4-2)

2. 相対評価の低下

絶対評価は87.5%、個人内評価は46.9%、相対評価は31.1%の教師が行っている。小学校では、相対評価的視点が薄れているといえるが、低学年では特にそうである。都県別にみると、相対評価を行っている教師は、岡山県で52.2%に対し、東京都や新潟県で16%程度である。(図4-4、図4-5、表4-4)

第2節 「学習の記録」の記入にあたって—具体的な手順や方針—

「学習の記録」を記入するにあたり、児童の長所を伝えることを意識している教師は98.5%、問題点や課題を伝えることを意識している教師は52.0%。今や通知票は、長所を中心に伝える媒体となっている。評価の基準としては、テストの結果だけでなく、さまざまな要素が複合的に考慮されている。評価の手順としては、ふだんから「学習の記録」を意識して

記録をとっている教師は84.9%に上り、テストだけではないさまざまな評価基準もいったん点数化している教師も6割強いる。ただし、学年差や通知票の形式による差がみられる。さらに、「学習の記録」を記入する際の手順や方針について、因子分析を適用したところ、「テストの重視」「日常的評価の明瞭性」「結果以外への配慮」「長所伝達の意識」の4因子が析出された。因子得点の平均値を都県別や教職経験年数別に比較すると、各属性の傾向がわかりやすい。(図4-6～図4-9、表4-5、表4-6)

第3節 評価についての考え方

1. 評価についてどのように考えているか

97.0%の教師が評価は児童への励ましや動機づけになると答えており、評価は積極的に意義づけられている。また8割の教師が、否定的評価は児童の自信を失わせるだけだと考えている。テストに関しては、努力の反映とみる教師は64.3%、手作りのテストを使うべきと考えている教師は33.3%である。観点別評価については、基礎学力の向上につながると考えている教師は6割、児童を観点別にみると無理があると考えている教師は約半数である。(図4-10)

2. 教師の評価観－客観志向と個性志向

「客観的な基準を使って、児童を公平に評価すること」と「直感的であっても、児童の個性を重視して評価すること」のうち、あえていえばどちらを重視しているかをたずねたところ、58.1%の教師が前者を、40.7%の教師が後者を選んだ。小学校では、客観志向と個性志向の2つが拮抗している。(図4-12)

第5章 教育観と教職生活

第1節 小学校教員の教育観

1. 教育観の全体的傾向

2つの極端なことがらをペアにして設定し、授業や生徒指導の場面で「あえていえば重視していると思うほう」を、強制的に選択させる手法によって、教員の日常的な指導の背後にいる教育観を浮かび上がらせようと試みた。レベルの高い学校を選択するよりは適性・個性を重視した進路選択、個性的な児童を育てるよりは集団の中での協調性を養うこと、学習の強制よりは自発的な学習意欲や習慣をつけることが、支配的な教育観である。「得意な教科の学力を伸ばす／不得意な教科の学力を伸ばす」「家庭や校外での生活もできるだけ指導する／学校の責任を学校生活に限定する」「客観的な基準を使って児童を公平に評価する／直感的であっても児童の個性を重視して評価する」「教科書や指導要領をとにかく最後まで扱う／一通り終わらなくても基本的な考え方を身につけさせる」－これらについては、相対的に意見が拮抗している。(図5-1)

2. 中学校教員の教育観との比較

小学校教員は、中学校教員と比較したとき、①受験指導の学校外への委任、②学校＝社

会化機関として捉えるよりも子どもの可能性が開花するのを支援する立場、③学校の責任を学校生活に限定するのではなく、家庭や校外での生活もできるだけ指導する、④直感的でも子どもの個性を重視した評価などの特徴を持つ。(表5-1)

3. 教育観のタイプ

多変量解析の手法によって、小学校教員の教育観を総合的に捉え、そのタイプ分けを行った。教育観を分類するための尺度として、第Ⅰ軸<教育訓練>か<個性重視>か、第Ⅱ軸<知識教授型学校>観か<生活型学校>観かという、2つが得られた。第Ⅱ軸は、学校教育の任務と教えるべき(育てるべき)範囲をどう設定するか(授業や知識教授に限定するのか、生活や心の教育を行うのか)に関する尺度であり、第Ⅰ軸は、第Ⅱ軸で分類されたことがらをどうやって教育(発達を支援)するのか(教え込みや訓練によるのか、個性重視か)に関する尺度である。この2つの尺度を組み合わせると、①知識教え込み型、②知識個性重視型、③生活個性重視型、④生活訓練型という4つの教育観のタイプが得られる。(表5-2、表5-3、図5-9)

第2節 生活時間

1. 退勤時刻

6時ころを最頻値(29.2%)として、5時半ころから6時半ころの間に7割以上が集中している。中学校教員と比べると、退勤時刻がおよそ1時間程度早い。(図5-15)

2. 家庭での生活時間

平均時間は、家で新聞を読んだり読書する時間=30分強、テレビを見たり、音楽を聴く時間=60.2分、家で学校の仕事に費やす時間=62.6分、家庭の仕事をする時間=84.7分。家庭の仕事をする時間については、性差が大きく、男性(43.3分)に比べて女性(106.8分)で60分強長い。家の生活のしかたは、多変量解析(クラスター分析)によって、<仕事・余暇型><家事集中型><新聞・読書型>という、3つのタイプに分かれた。仕事・余暇型は、余暇時間とりわけテレビや音楽の時間が格段に長く、同時に家で学校の仕事に費やす時間も長いのが特徴。家事集中型は、家庭の仕事にあてる時間が他のタイプの3倍程度と長く、余暇時間が短いのが特徴である。新聞・読書型は、テレビ・音楽が短く、学校の仕事に費やす時間、家庭の仕事をする時間もごく短い。「家ではなにもしないタイプ」といったほうがよい。(図5-16～図5-19、表5-4、表5-5)

第3節 教職生活の将来展望

「管理職にはならず、一教師として」が過半数の50.7%を占め、最大多数である。これに「将来は教師を辞めたい」(16.7%)、「できれば管理職に」(14.4%)、「特に考えたことはない」(14.3%)が、いずれも15%程度でつづく。「今、真剣に教師を辞めたい」と答えた教員は(決して無視できる実数ではないが)1.8%と少数である。(図5-23)